

野尻湖遺跡群における先土器時代石器群の変遷

谷 和 隆

はじめに

一九四九年（昭和二四）の群馬県岩宿遺跡の発掘調査により、出土層位が異なる複数の石器群が認識され、日本の先土器時代研究の幕開けと同時に石器群の編年研究も始まった^①。その後、先土器時代遺跡の発掘調査は全国に広まった。

高度経済成長に伴う開発の増加により、一九六〇年代の後半から発掘件数が爆発的に増え、同時に調査規模も拡大した。特に首都圏近郊の相模野台地や武蔵野台地の所在する南関東の調査成果は著しく、「月見野・野川以前と以後」として、先土器時代史を二分する画期に位置づけられている^②。

南関東地域は西方に位置する箱根山、富士山の火山灰による厚いローム層の堆積を持つ。このローム層の厚みは石器群の出土層位の把握と、台地内の出土層位の遺跡間対比を可能とした。一九七〇年代には、層位的出土事例に裏打ちされた南関東の編年案が発表された^{③④}。これらの編年案の完成度は高く、現在でも南関東地域の編年の軸となっている。

その後、開発の波は首都圏から地方に波及し、全国各地で先土器時代遺跡の発掘調査件数が増えた。しかし、南関東のように厚いローム層の堆積を持つ地域はほとんどなく、層位に基づく編年を組むことができなかった。また、地方の石器群は、南関東と比べると数が少なく、地域の枠組みを作成できるだけの全体像が見えなかったことも事実だろう。

「月見野・野川以後」となってから四〇年近くたった現在、いまだに南関東編年に並ぶ地域編年はないといえよう。しかし、全国で確実に調査事例が増え、徐

徐にその姿も見えつつある。そのようななか、一九九〇年代におこなわれた野尻湖遺跡群の大規模発掘調査で、層位的事例を伴い多種多様な石器群が検出された。本稿はこの成果をまとめ、南関東編年に対峙しうる地域編年の確立を目指す。

一 野尻湖遺跡群の発掘調査

野尻湖遺跡群での先土器時代研究史は、一九五三年に芹沢長介と麻生優によって杉久保遺跡のナイフ形石器が紹介されたことから始まる^⑤。

野尻湖岸からナウマンゾウの臼歯が採集されたことを契機に、一九六二年には「野尻湖発掘」が始まる^⑥。ナウマンゾウやオオツノシカの化石が多く発見され「ナウマンゾウの湖」として全国的に著名となった。野尻湖の発掘は野尻湖発掘調査団により定期的に実施されており、二〇〇六年三月には第一六次発掘がおこなわれた。

一九六二～一九六六年に杉久保遺跡の調査^⑦、一九六三年に伊勢見山遺跡の調査^⑧が実施され、野尻湖周辺に複数の先土器時代遺跡の存在が知られるようになった。また、一九七六年から一九九八年の間、野尻湖発掘調査団による八回の陸上発掘がおこなわれた。この調査により野尻湖周辺のトレンチ調査や、表面採集調査により、多くの先土器時代遺跡の存在が確認され、野尻湖遺跡群と呼ばれるようになった^⑨。

一九八九年からは、開発に伴う緊急調査が実施されるようになった。特に一九九三年から始まる上信越自動車道の建設に伴う調査^{⑩⑪}、一九九九年から本格化した国道バイパス建設に伴う調査^{⑫⑬}では、一〇万点を超す膨大な数の石器が検出され、

野尻湖遺跡群が国内有数の遺跡規模、密度を誇る遺跡群であることが明らかとなった。

二〇〇三年に「野尻湖遺跡群の旧石器時代編年」と題したシンポジウムが開かれ、筆者らが野尻湖遺跡群の大規模発掘調査の成果を基とした編年案を示した。⁽¹⁸⁾ この編年案はシンポジウムの発表資料として与えられたものであり、整理作業中の資料も存在した。本稿では、これらの成果に新しい資料を加え、再考したものを正式な論考として公表する。

二 編年の方法

二つの要素を組み合わせて編年をおこなう。一つは、石器の型式学的な分析、もう一つは、石器群の生活面を捉え、出土層準を位置づけることである。石器型式の検討は石器群の内容記述でおこなうこととし、ここでは、野尻湖遺跡群の層序と、生活面の把握方法について触れる。

1 野尻湖遺跡群の層序

野尻湖遺跡群は、西に位置する妙高山、黒姫山、飯縄山の三か所の火山からの、火山灰によるローム層が堆積している。多くの石器群はこのローム層中から検出される。遺跡間のローム層は対比が可能で、共通した層名が与えられている。図1に遺跡群の中から堆積が厚い貫ノ木遺跡と日向林B遺跡の土層柱状図を示した。貫ノ木遺跡は作図断面でも石器が出土する。日向林B遺跡は石器群出土地点から一〇センチ程度はなれた地点の図となるが、堆積状況は石器出土地点と同じである。先土器時代遺物包含層はⅢ層以下となる。Ⅲ層は黒色土とローム層の漸移層である。野尻湖発掘調査団の上部野尻ローム層Ⅱモヤ層に対比される。ローム層上面付近への黒色の染込み部分のため、地表の植生等の影響等と考えられる遺跡差がみられる。層厚は一五センチから二五センチ程度。Ⅳ層は黄褐色のローム層で、野尻湖発掘調査団の上部野尻ローム層Ⅱ上部上面と下部に対比される。下層と比較するとやわらかく粘性が低い。層厚は四センチ程度と厚い。Ⅴa層は下層の黒色帯と

上層の黄褐色ローム層が混ざり合う漸移的な層で層厚は二〇センチ程度ある。野尻湖発掘調査団の上部野尻ローム層Ⅱ最下部に対比される。始良丹沢火山灰（以下ATと記す）のピークがある。^(19・20) Ⅴb層は黒色帯で層厚は三〇センチ程度ある。粘性があり締りがよい。野尻湖発掘調査団の上部野尻ローム層Ⅰ黒色帯上部に対比される。Ⅴc層は黒色帯下部のやや明るい色調部である。日向林B遺跡のようにⅤc層が認識できない遺跡では、Ⅴb層下部に含まれていると判断している。Ⅴb層よりスコリアを多く含む。野尻湖発掘調査団の上部野尻ローム層Ⅰ黒色帯下部に対比される。Ⅵ層は黄褐色のローム層で層厚は二〇センチ程度ある。粘性があり締りがよく、スコリアや小さな火山礫が含まれる。野尻湖発掘調査団の上部野尻ローム層Ⅰの下半部に対比される。今のところⅥ層以下に生活面を持つ石器群は発見されていない。

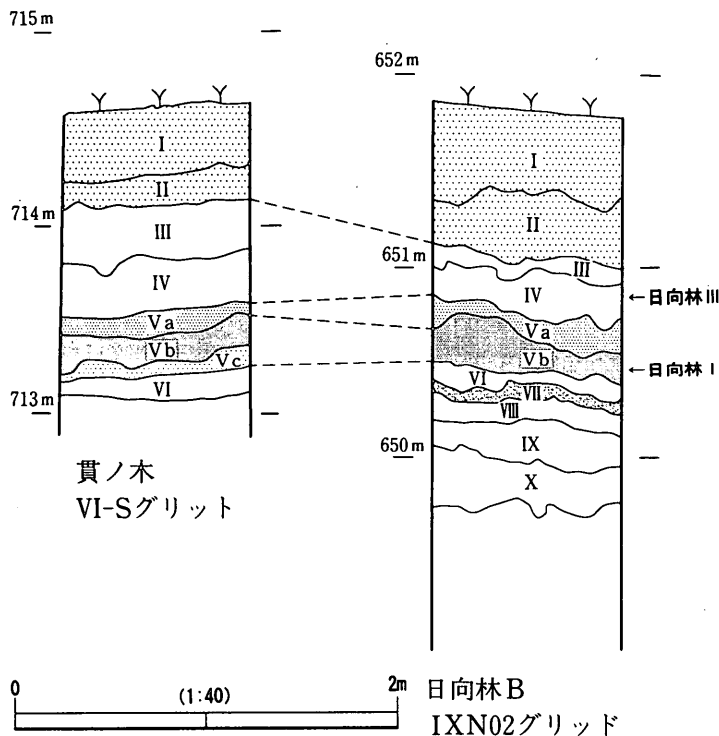


図1 野尻湖遺跡群の層序

2 生活面の把握

相模野編年の論考⁽³⁾では「先土器時代の遺跡の発掘では、当初は遺物が少なく、極大に達するとまもなく急激に遺物の出土量が減少するのが一般的傾向である。礫群等の遺構が遺物の極大値に達した直後に確認されるのもまた一般的傾向のようである。」とされている。この時に示された

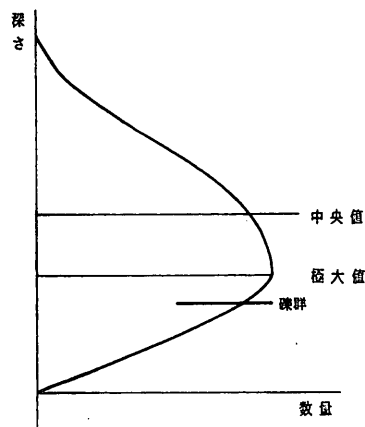


図2 遺物垂直分布模式図
(文献 (3) から転載)

た模式図が図2である。この現象は現在でも先土器時代遺跡ではごく一般的なことと、筆者も野尻湖遺跡群で多くの発掘調査をおこなってきたが、まさにこのとおりの遺物出土状態であった。相模野編年論考ではさらに「相対的に安定した面として礫群面を重視して、これを生活面と推定した」とされている。

図3に日向林B遺跡日向林I石器文化BL1の出土層位別の垂直分布図と層位別石器出土数を示した。日向林B遺跡では、石器個個の取り上げ時に、出土座標と出土層位の記録を実施している。石器数が最も集中するのが、垂直分布図と層位別出土数の両方でVb層となる。Ⅲ層からVb層に掘り下げにつれ、遺物密度が増し、Vb層を越えてⅥ層になると、遺物が出土しなくなる。この現象は、相模野台地の例と共通しており、同じような捉え方ができることを示している。通常のローム層の堆積がみられる野尻湖遺跡群の遺跡については、いずれも日向林B遺跡と同様の垂直分布を示すことから、野尻湖遺跡群の生活面の把握は相模野台地における生活面の認識方法を適用した。

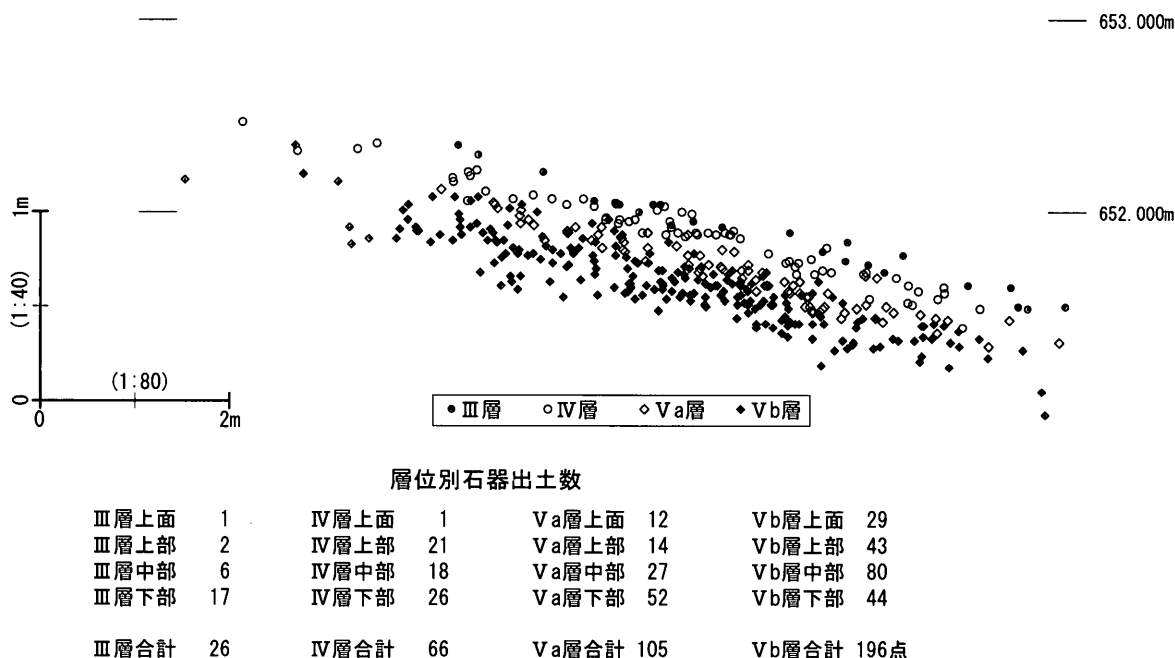


図3 日向林I石器文化BL1の遺物垂直分布図と層位別石器出土数

三 野尻湖遺跡群の先土器時代石器群の編年

1 野尻湖第Ⅰ期

(1) 野尻湖第Ⅰ期の出土層準と古環境

野尻湖第Ⅰ期の石器群の生活面はVb層中にある。野尻湖遺跡群針ノ木遺跡低地部の花粉分析によると、ナラ類とブナ林の拡大期とされている。²⁶⁾現代より気温が低い、氷期としては温暖期にあたり、降水量も多めで森林が発達していたようだ。貫ノ木遺跡ではVb層中からクマザサ属型のプラントオパールが検出されており、周囲に森林があったことが裏づけられている。²⁷⁾

(2) 台形石器群 (図4・1～23)

台形石器を特徴とし、石刃を素材とするナイフ形石器を組成しない石器群を台形石器群とする。日向林Ⅰ石器文化、大久保南Ⅰa石器文化、上ノ原Ⅰb石器文化、貫ノ木HⅠⅠ石器文化、貫ノ木HⅡⅠ石器文化、仲町遺跡BP3地点が該当する。台形石器(6～11)、搔器状石器(12～16)、貝殻状刃器(17～23)、削器類、斧形石器(1～5)を主な組成とする。

台形石器は、貝殻状剥片を素材とし、素材打面と末端を側縁に置き加工をほどこす。加工には器面を覆うような平坦剥離と、素材を折断する急角度の剥離が用いられ、両面あるいは片面にほどこされる。平刃状と切出状の刃部形態があるが、基部形状は共通しているため同じ柄が付けられていたと想定できる。大きさは長さ4センチ前後にまとまっている。

搔器状石器は貝殻状剥片の末端に連続する急角度の加工による刃付けがほどこされている。「ウワダイラ型台形石器」²⁸⁾、「立野ヶ原型ナイフ形石器」²⁹⁾、「台形様石器」の一部に相当する石器と思われる。これらの器種認定にあたっては、加工されない素材の鋭い縁辺を刃部、加工部位を側縁として認識しているようだ。筆者は後述する貝殻状刃器との比較検討の中から、搔器状石器に施される連続的な加工は単なる側縁加工ではなく、刃部作出のための加工と判断した。野尻湖第Ⅱ期

に出現する搔器のプロトタイプの意味合いも含め、搔器状石器の名称を与えた。²⁶⁾野尻湖第Ⅰ期に共通してみられる器種である。日向林Ⅰ石器文化で二七六

点もの数が検出されているが、他の石器群には数点の組成がみられるのみである。

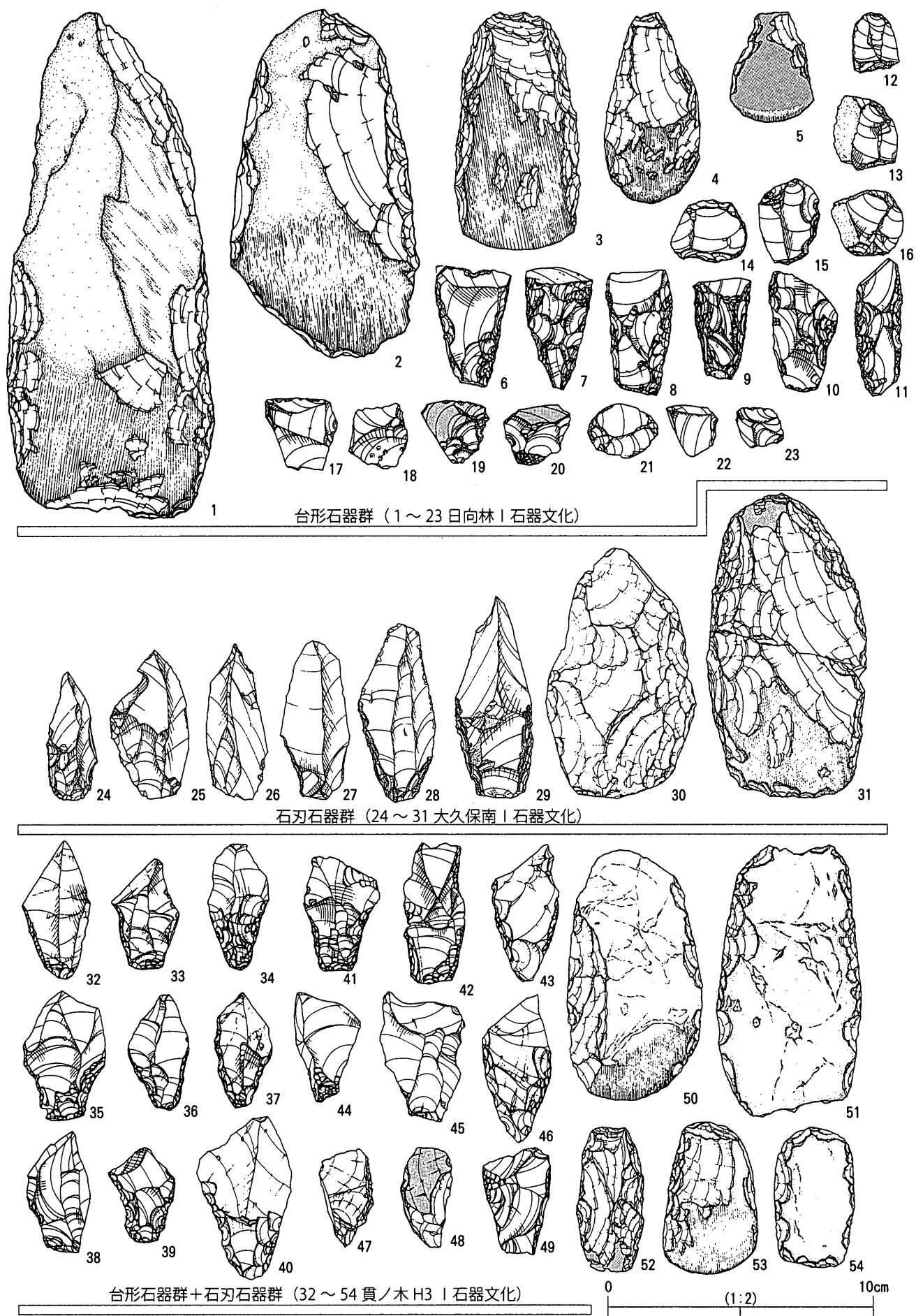
鋭い縁辺と切り立った側縁を持つ石器を貝殻状刃器とした。²⁸⁾切り立った側縁が確保できればよいと、加工部位はわずかであり、素材剥片の形状がほぼ維持される。また、側縁に鋭い縁辺がある搔器状石器の多くは、貝殻状刃器としても用いられていた。「台形様石器」²⁹⁾、「藪塚系ナイフ形石器」の一部がこの器種に相当すると思われるが、加工頻度が低いため、多くの報告書で微細剥離を有する剥片や、二次加工のある剥片とされているものが多いと思われる。使用によるものと想定できる微細剥離と、側縁部のわずかな加工が器種認定の根拠となるため、黒曜石や珪質頁岩のような微細な剥離が残る石材については器種判別が可能だが、無斑晶質安山岩のような、風化しやすく気泡を多く含む石材での認定は難しい。貝殻状刃器のような簡易な石器はどの時期にも存在するが、ある程度の数量的まとまりがないと、器種として認定することができない。日向林Ⅰ石器文化では、一七六点もの貝殻状刃器が検出されている。

削器類には削器、抉入削器、鋸歯縁状削器等が存在するが、いずれも、機能部位のみに加工がほどこされており、素材形状のばらつきも大きく、定まった形状がない。

斧形石器の組成数は他地域と比べ突出して多い。片面に滑らかな礫面を残す蛇紋岩の分割礫や剥片を素材とし、左右側縁にやや粗い面的な加工をほどこし、刃部には研磨をほどこすものを基本とする。平面形は短冊形、撥形、わらじ形などの形状があるが、中間形も多く一定の形態にまとまらない。小型が多い傾向はあるが、大きいものから小さいものまで、一定の大きさにまとまることはない。

石刃および石刃製石器は基本的に組成しない。縦にも横にも長くない貝殻状剥片を目的とした剥片剥離が確認できる。

石材は黒曜石を主体とする石器群と、黒曜石を用いない石器群に二分される。大規模な遺跡では黒曜石が主体となる。



7 図4 野尻湖第I期の石器群

日向林Ⅰ石器文化には大規模な環状ブロック群が、大久保南Ⅰa石器文化と上ノ原Ⅰb石器文化には小規模な環状ブロック群がみられる。

(3) 石刃石器群 (図4・24～31)

石刃を素材とするナイフ形石器を特徴とし、貝殻状剥片素材の石器を組成しない石器群を石刃石器群とする。大久保南Ⅰb石器文化が該当する。ナイフ形石器(24～29)、石刃、斧形石器(30・31)を主な組成とする。

ナイフ形石器は、打面が広く残る厚手の石刃を素材とする。基部を中心に加工がほどこされ、加工により尖端が作出されるものも含まれる。基部には打面が残され、厚手で横側面形のそりが大きい。

また、石刃が目的剥片となる。石刃石核の調整頻度は低く、大型剥片の打面や折れ面などの小口面を作業面として石刃を剥離している。そのため、厚手で打面が広く残る石刃が目立つ。

斧形石器の特徴は台形石器群と大きな違いはない。数量も複数まとまって出土する。

明確に位置づけられるのは、大久保南Ⅰb石器文化のみだが、環状ブロック群が認められる。石材は黒曜石が主体となる。

(4) 台形石器群と石刃石器群の両者がみられる石器群 (図4・32～54)

貫ノ木H3Ⅰ石器文化、貫ノ木H4Ⅰ石器文化、東裏H1Ⅰ石器文化が該当する。ナイフ形石器(32～40)、台形石器(41～49)、搔器状石器、貝殻状刃器、斧形石器(50～54)を主な組成とする。

台形石器群と石刃石器群の両者を併せ持つ石器群だが、本石器群に特徴的なベン先形のナイフ形石器と台形石器がある。寸詰まりの縦長剥片を素材とするもので、素材打面を基部に置き、基部周辺に加工がほどこされる。素材末端が尖るタイプをベン先形のナイフ形石器(32～40)、素材末端が開くタイプを台形石器(41～49)としている。両者の基部形態は共通する。

斧形石器は他の石器群と共通しており、複数まとまって検出される。

大規模な石器群の石材には黒曜石が多用され、小規模な石器群の石材に無斑晶

質安山岩や玉髓などの黒曜石以外の石材が多用される。

貫ノ木H3Ⅰ石器文化には大規模な環状ブロック群がある。

2 野尻湖第Ⅱ期

(1) 野尻湖第Ⅱ期の出土層準と古環境

野尻湖第Ⅱ期の生活面はVa層中にあるVa層中にはATの極大値があるが、層厚が薄いため、ATの上か下かの判断はつけがたい。花粉分析ではカバノキ属の拡大期とされており、気候が寒冷化したとされている。野尻湖第Ⅰ期より寒く、野尻湖第Ⅲ期より暖かい時期となる。

(2) 台形石器群 (図5・1～20)

野尻湖第Ⅰ期と同じで、台形石器を特徴とし、石刃素材のナイフ形石器を組成しない石器群を台形石器群とする。仲町遺跡JS地点の石器群が該当する。台形石器(1～10)、ナイフ形石器(11～14)、搔器状石器(15・16)、楔形石器(17・18)、斧形石器(19・20)を組成する。

台形石器は、貝殻状剥片を素材とし、素材打面と末端を側縁として加工をほどこす。腹面側から、急角度の剥離がほどこされ、ノッチ状の側縁が作出される。

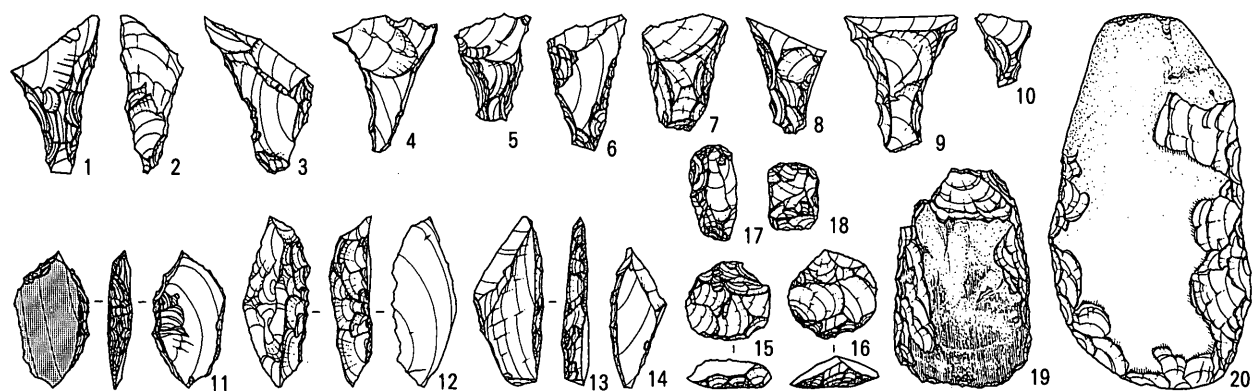
また、野尻湖第Ⅰ期同様に平坦な剥離がほどこされるものも存在する。

ナイフ形石器は多様な形状の剥片を素材としており、加工も多様で、斉一性が低く定まった形態がない。

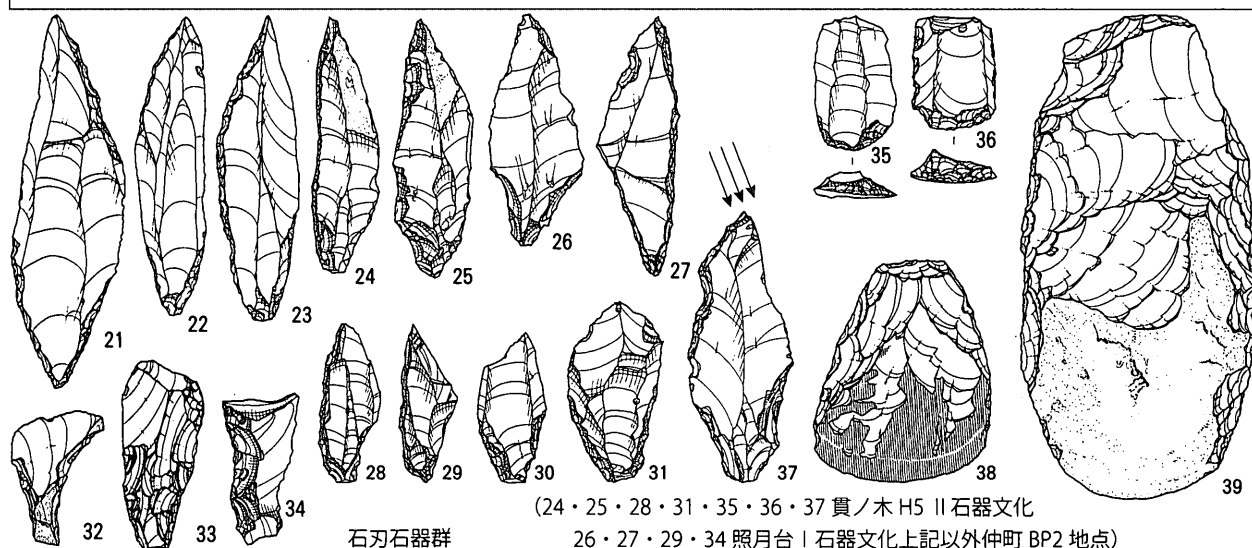
楔形石器の数は多く、長さ二～三センチ程度の大きが多い。また、楔形石器によると考えられる傷が付いた敲石が特徴的に存在する。

斧形石器は、蛇紋岩の礫面を有する剥片や、分割礫を素材としており、第Ⅰ期の特徴がそのまま継続している。傾向としては第Ⅰ期と比べ、平たい刃部が減り丸くて幅の狭い刃部が多くなる。また、礫を素材とする表裏両面に礫面を有する斧形石器(20)もある。

いまのところ、仲町遺跡JS地点の石器群のみで、石材はチャートや鉄石英、無斑晶質安山岩が用いられており、黒曜石は少ない。



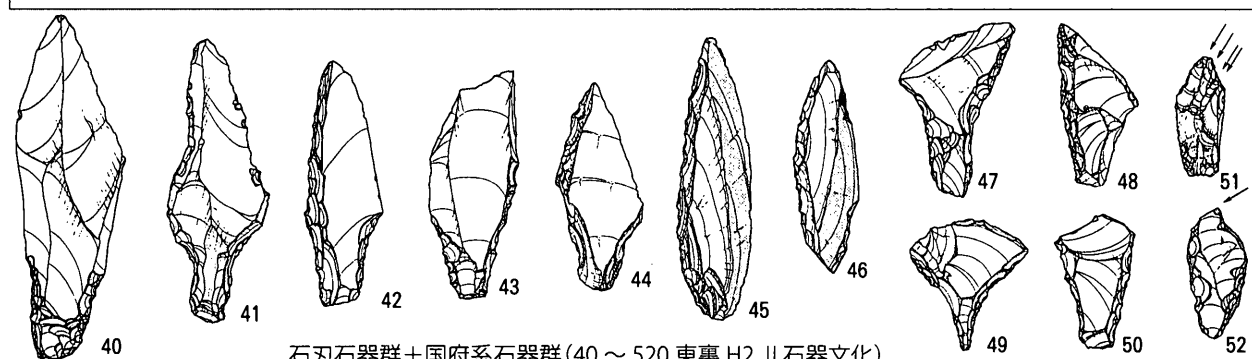
台形石器群 (1 ~ 20 仲町 JS 地点)



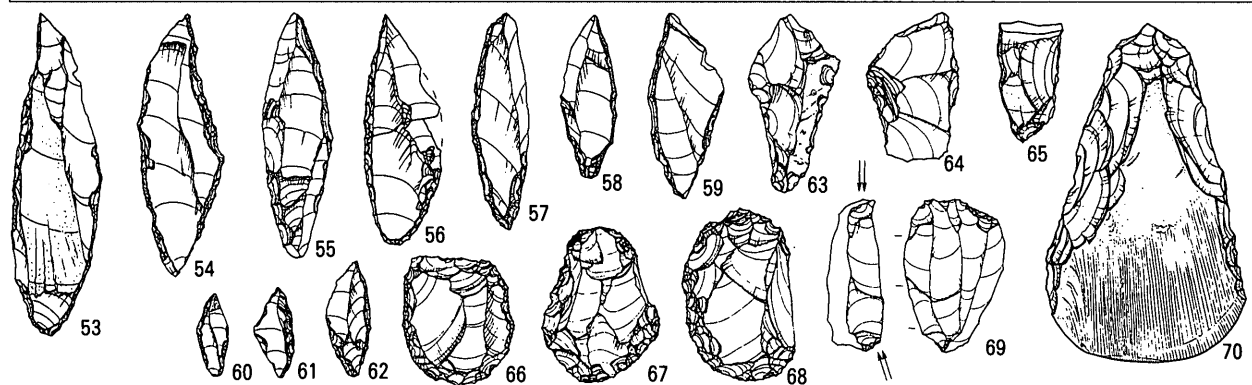
石刃石器群

(24・25・28・31・35・36・37 貫ノ木 H5 II 石器文化)

26・27・29・34 照月台 I 石器文化 上記以外仲町 BP2 地点)



石刃石器群+国府系石器群 (40 ~ 520 東裏 H2 II 石器文化)



茂呂系石器群 (56・70 吹野原 I 石器文化・左記以外裏ノ山 I 石器文化)

0 (1:2) 10cm

図5 野尻湖第II期の石器群

(3) 石刃石器群 (図5・21～39)

石刃を素材とする基部加工のナイフ形石器を特徴とする石器群を石刃石器群とする。²⁸ 仲町遺跡B P2地点、貫ノ木H4Ⅱ石器文化、貫ノ木H5Ⅱ石器文化、照月台I石器文化が該当する。主な器種組成はナイフ形石器(21～31)、台形石器(32～34)、搔器(35・36)、彫器(37)、楔形石器、石刃、斧形石器(38・39)である。ナイフ形石器は石刃を素材として、基部を中心に加工がほどこされる。加工による鋭い尖端を持つものも多く含まれる。五ヶ所を越す大型品が目立つ。二側縁加工のナイフ形石器も一定量存在する。これらは素材の剥離軸と石器の長軸がほぼ一致する。また、基部への加工がノッチ状となり、剥片尖頭器のような形状となるもの(26)も含まれる。

台形石器の特徴は台形石器群と共通する。

確実に搔器と彫器に認定できる器種がこの時期に登場する。搔器は分厚くやや寸詰まりの縦長剥片を素材とし、素材の末端に刃部加工がほどこされている。平面形は拇指状を呈すものが多いが、刃部再生が繰り返されたためか、短いものや、刃部加工が素材打面側までおよぶものもみられる。彫器には特に定まった形態がないようだが、明瞭な槌状剥離打面の作出が認められる。また、基部形態がナイフ形石器と共通するものが特徴的にみられ、ナイフ形石器の刃部再生を槌状剥離でおこなったと考えられる彫器(37)が含まれる。

楔形石器は台形石器群と比べると数量が少ないが、楔形石器のあたりとみられる傷が付いている敲石と共に組成する。

斧形石器は第Ⅰ期と同様に片面に礫面を残す蛇紋岩の剥片や分割礫を素材とする。

量が多いわけではないが、遺跡内での石刃剥離があり、稜付の石刃、頭部調整、打面調整が認められる。

石材は珪質頁岩が中心となる石器群と、黒曜石が主体となる石器群がある。

(4) 石刃石器群と国府系石器群の両者がみられる石器群 (図5・40～52)

無斑晶質安山岩を主要石材とし、板状の剥片素材の石核から連続して剥離され

る横長剥片を素材とするナイフ形石器を主体とする石器群を国府系石器群とする。いまのところ単独の国府系石器群はみつからないが、石刃石器群中に、国府型ナイフ形石器が伴う東裏H2Ⅱ石器文化が存在する。器種組成はナイフ形石器(40～46)、台形石器(47～50)、彫器(51・52)を主とする。

石刃素材のナイフ形石器と台形石器の特徴は石刃石器群と共通する。国府型ナイフ形石器の背面には底面がみられ、底面以外の主な一次剥離は一枚である。素材打面一側縁に鋸歯状の加工がほどこされる。遺跡内に国府系石器群の石器製作の痕跡はほとんどない。

石刃素材の石器には珪質頁岩が、国府系石器群には無斑晶質安山岩が多用されている。

(5) 茂呂系石器群 (図5・53～70)

二側縁加工のナイフ形石器を主体とする石器群を茂呂系石器群とする。裏ノ山Ⅱ石器文化、吹野原Ⅰ石器文化が該当する。ナイフ形石器(53～63)、台形石器(64・65)、搔器(66～68)、斧形石器(70)を主な組成とする。

ナイフ形石器はブランディングにより二側縁に加工がほどこされる。石刃のほか、寸詰まりの縦長剥片を素材としている。石刃素材のナイフ形石器は縦に長く、素材剥離軸と石器の主軸のずれは少ない。寸詰まりの縦長剥片を素材とするものは、素材は剥離軸と石器の主軸がずれる場合が多い。大きさは五ヶ所を越す大型もみられるが、数量的には三ヶ所前後の小型が多い。

搔器は黒曜石等の厚手の幅広剥片を素材とするものと、鶏卵状のチャートの分割剥片を素材とするものが存在する。平面形は拇指状、円形を呈する。遺跡内での石刃の剥離は少ない。吹野原Ⅰ石器文化に斧形石器が組成するほか、裏ノ山Ⅱ石器文化にも斧形石器が組成すると考えられる。石材は黒曜石が主体となる。

3 野尻湖第三期

(1) 野尻湖第三期の出土層準と古環境

野尻湖第三期の生活面はⅣ層下部から中部にあたる。花粉分析による植生は亜

寒帯針葉樹林となる。最終氷期の最寒冷期に相当し、寒冷で乾燥した気候であった。また、水生植物の花粉が産出することから、低地での開水域が広がったとされている。

(2) 尖頭器石器群 (図6・1～48)

主に二側縁加工のナイフ形石器に、槍先形尖頭器が組成する石器群を尖頭器石器群とする。東裏H2Ⅲ石器文化、貫ノ木H2Ⅲa石器文化、七ツ栗I石器文化が該当する。槍先形尖頭器(1～7・24・29～37)、ナイフ形石器(8～15・22・23・38～48)、搔器、彫器を主な組成とする。

三センチ程度的小型で片側縁に肩を持つ左右非対称形を呈する槍先形尖頭器(1～7・24)を特徴としている。尖端から肩の部分に槌状剥離がほどこされるものと、同部分に素材の縁辺が残されるものが多く含まれている。これらは切出形を呈するナイフ形石器(14)と共通する用途が想定できる。両面に加工がほどこされる横断面形が凸レンズ形を呈するものと、加工が片面に偏り横断面形がD字形を呈するものがある。また、貫ノ木H2Ⅲa石器文化には五～一〇センチ程度の中型で平面形が左右対称で、尖端から槌状剥離がほどこされる両面加工の槍先形尖頭器が、前述した小型で肩の張る槍先形尖頭器の他に組成している。

ナイフ形石器は五センチ以下の小型が中心となる。縦長剥片を素材とするが、石刃と呼べるような定形的な素材は少ない。加工は二側縁にほどこされ、素材が折断され形状が大きく変化するものが多い。完成形の斉一性は低い。切出形のナイフ形石器にはブランディングの他に、平坦な剥離による加工がみられ、槍先形尖頭器との中間的なナイフ形石器が存在する。

搔器はとにかく数が多い。チャートや黒曜石を石材とする小型で、拇指状あるいは円形を呈する一群と、無斑晶質安山岩を石材製の分厚い石刃を素材とする縦長の一群がある。

彫器はあまり多くなく、定まった形態はなかったと考えられる。

(3) 国府系石器群 (図6・49～53)

無斑晶質安山岩製の横長剥片を素材とするナイフ形石器を特徴とする石器群を

国府系石器群とする。貫ノ木H1Ⅱ石器文化が該当する。

ナイフ形石器の素材は、板状の無斑晶質安山岩製の大型剥片から連続して剥離された横長剥片である。この剥片の背面には素材の底面が残されており、底面以外の剥離面は複数みられ、野尻湖第Ⅱ期の国府型ナイフ形石器にみられる一枚とは異なる。これは、板状剥片石核における打点の移動が、第Ⅱ期は直線的に移動するのに対し、第Ⅲ期は左右に振れながら移動することを示している。二次加工は素材打面側の側縁全体と、末端側側縁の基部側の二側縁にほどこされる。この際、左右の側縁で加工がほどこされる面が、背面と腹面で異なる場合が多く、横断面形がひし形となる。また、これらには縦長剥片を素材とした基部加工のナイフ形石器も相伴している。

(4) 石刃石器群 (図6・54～60)

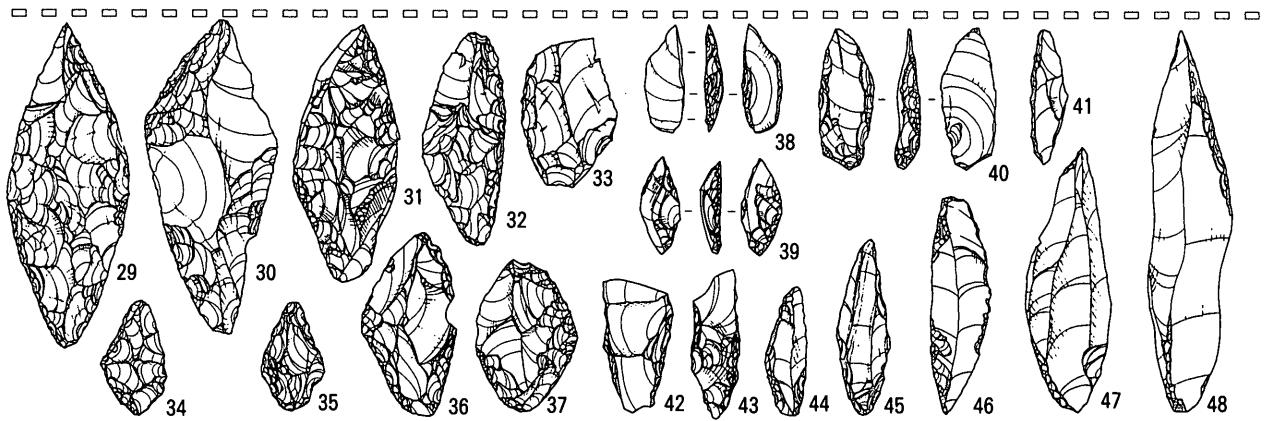
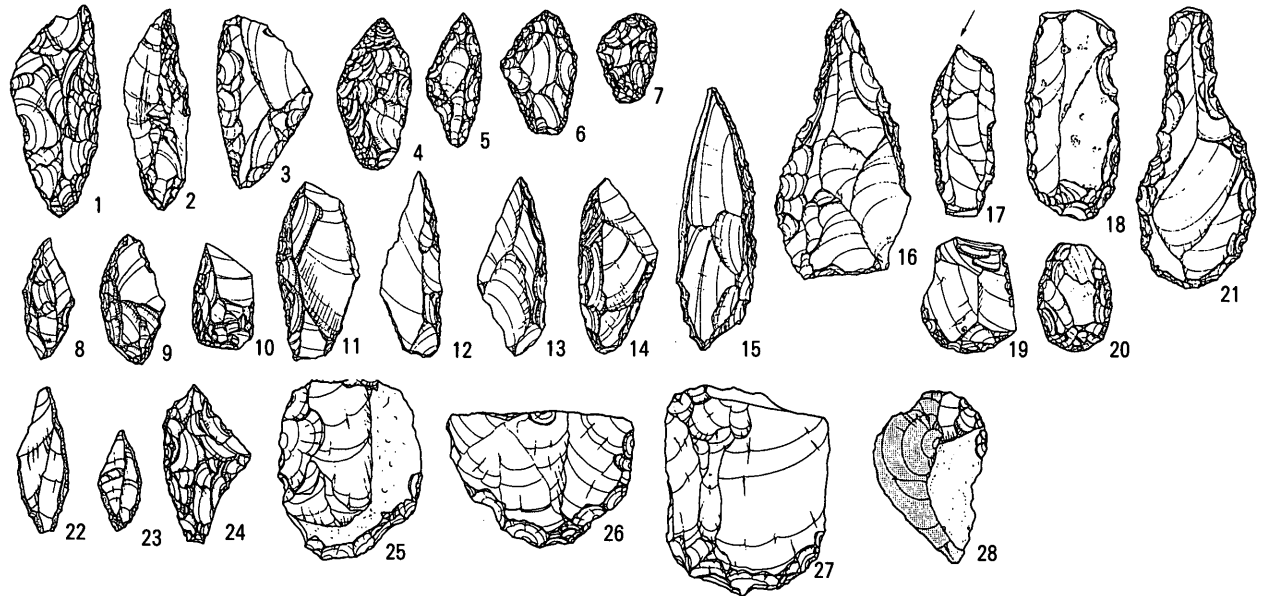
石刃素材の基部加工のナイフ形石器を特徴とする石器群を石刃石器群とする。貫ノ木H1Ⅱ石器文化に石刃石器群があり、候補として検討されている(18・30)。しかし、貫ノ木遺跡H1地点における、石刃石器群の出土層位は、Ⅲ層下部からⅣ層上部であり、層位的には野尻湖第Ⅳ期となる。同地点には黒曜石を主要石材とする野尻湖第Ⅳ期の杉久保系石器群も存在することから、この石器群が杉久保系石器群に属す可能性も考えられる。そのため、本稿では明確な位置づけはせず、候補として取り上げることとする。

器種組成はナイフ形石器(54～60)、搔器となる。ナイフ形石器は五センチ以上の長さを持ち、珪質頁岩あるいは珪質凝灰岩の石刃を素材として、基部に加工がほどこされる。基端には素材の打面が残される。

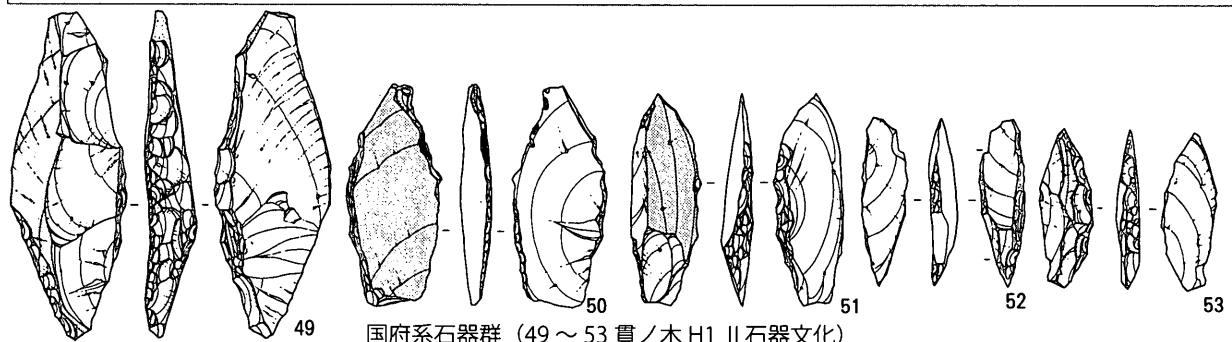
4 野尻湖第Ⅳ期

(1) 野尻湖第Ⅳ期の出土層準と古環境

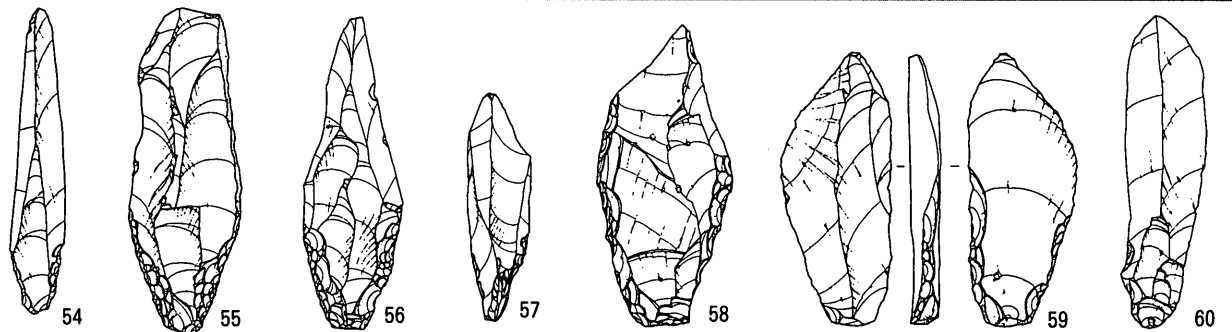
野尻湖第Ⅳ期の生活面はⅣ層上部からⅢ層下部にあたる。花粉分析による区分では、野尻湖第Ⅲ期と分かれていないが、最寒冷期を過ぎたものの、依然寒冷な気候であったと推測される。



尖頭器石器群 (1～21 東裏 H2 III 石器文化・22～28 七ツ栗 I 石器文化・29～48 貫ノ木 H2 III a 石器文化)



国府系石器群 (49～53 貫ノ木 H1 II 石器文化)



石刃石器群 (54～60 貫ノ木 H1 II 石器文化)

0 (1:2) 10cm

図6 野尻湖Ⅲ期の石器群

(2) 尖頭器石器群 (図7・13・16)

槍先形尖頭器を主体とする石器群を尖頭器石器群とする。貫ノ木H1Ⅲc石器文化、西岡Ⅲa石器文化が該当する。槍先形尖頭器(13・11) 搔器(15・16)、削器(12・14)をおもな組成とし、ナイフ形石器は組成しない。

貫ノ木H1Ⅲc石器文化の槍先形尖頭器(13・5)は五センチ前後で、両面に加工がほどこされる。平面形は先端が鋭く尖り、基部は丸く、最大幅が基部側に偏る涙滴形を呈する。一方西岡Ⅲa石器文化の槍先形尖頭器(6・11)は三センチ程度と小型で、加工部位が片面に偏るものが多い。

貫ノ木H1Ⅲc石器文化では隣接する石器文化との関係から、共伴器種がはっきりしない。西岡Ⅲa石器文化には片面加工の槍先形尖頭器と大きさや加工が共通する搔器(15・16)、小型の縦長剥片にノッチ状の刃付けを施した抉入削器(13・14)、小型の角錐状石器が伴う。

(3) 国府系石器群 (図7・28・36)

無斑晶質安山岩製の横長剥片を素材とするナイフ形石器を特徴とする石器群を国府系石器群とする。野尻湖第三期の国府系石器群と明瞭な差が認められないが、検出されている石器群数が増え、規模も大きくなる。西岡Ⅲb石器文化が該当するほか、東裏遺跡特別養護老人ホーム地点、上ノ原遺跡県道地点でも野尻湖第四期の国府系石器群が検出されている。

無斑晶質安山岩製の横長剥片を素材とするナイフ形石器(28・34)の素材、加工、形態は野尻湖第三期と共通しているが、縦長剥片素材の基部加工のナイフ形石器の共伴は明らかではない。

搔器や削器も組成するが明確な目的形態はないようで、残核等を素材としている。また、角錐状石器(36)も組成する。

(4) 杉久保系石器群 (図7・17・27)

杉久保型ナイフ形石器と神山型彫器を組成する石器群を杉久保系石器群とする。七ツ栗Ⅱ石器文化、貫ノ木H2Ⅲb石器文化、貫ノ木H1Ⅲb石器文化、仲町BP4地点が該当する。その他、杉久保型ナイフ形石器の標識遺跡である杉久保

A遺跡^①、上ノ原遺跡県道地点^②、東裏遺跡特別養護老人ホーム地点^③にも杉久保系石器群がみられる。器種組成はナイフ形石器(17・21)、彫器(22・24)、石刃を主体とする。

ナイフ形石器は、細長い石刃を素材として、基部と先端に加工がほどこされる。素材の形状自体が完成形に近いので、加工頻度は低い。基本的に素材の打面は除去され、基部腹面に平坦な剥離がほどこされるものが含まれる。

彫器は杉久保型ナイフ形石器の素材より、幅の広い石刃を素材としている。背面から素材軸を斜めに折断する槌状剥離打面調整を施し、背面側に槌状剥離を施す神山型彫器(23)が主体となるが、槌状剥離打面調整と彫刀面の背面、腹面が入れ替わるものや、彫刀面が素材側縁に平行する小坂型の範疇に入るもの(24)も多い。

数量が多い石刃は幅が広く、ナイフ形石器の素材となるものは少ない。

杉久保系石器群には槍先形尖頭器が伴わない例が多いが、貫ノ木H2Ⅲb石器文化に組成するほか(25・27)、上ノ原遺跡町道地点ではかなりの数の杉久保系石器群のナイフ形石器と槍先形尖頭器が同一範囲内から検出されている^④。

遺跡内での石刃剥離痕跡はほとんどなく、遺跡外で製作されたものが持ち込まれ、細部調整等が遺跡内でおこなわれていたと考えられる。

石材は珪質頁岩が主体となるが、無斑晶質安山岩も多い。珪質頁岩よりも産地に近い無斑晶質安山岩は、珪質頁岩の補完的な石材として用いられているものと思われる。無斑晶質安山岩が多い石器群には、七ツ栗Ⅱ石器文化の他に、杉久保遺跡があげられる。

5 野尻湖第V期

(1) 野尻湖第V期の出土層準と古環境

野尻湖第V期の生活面はⅢ層となる。Ⅲ層下部以下は野尻湖第四期の生活面が想定されているが、第四期と第V期の明瞭な境目はない。また、Ⅲ層上部には縄文時代早期の生活面があり、縄文時代早期、草創期との層位的な区分も明瞭では

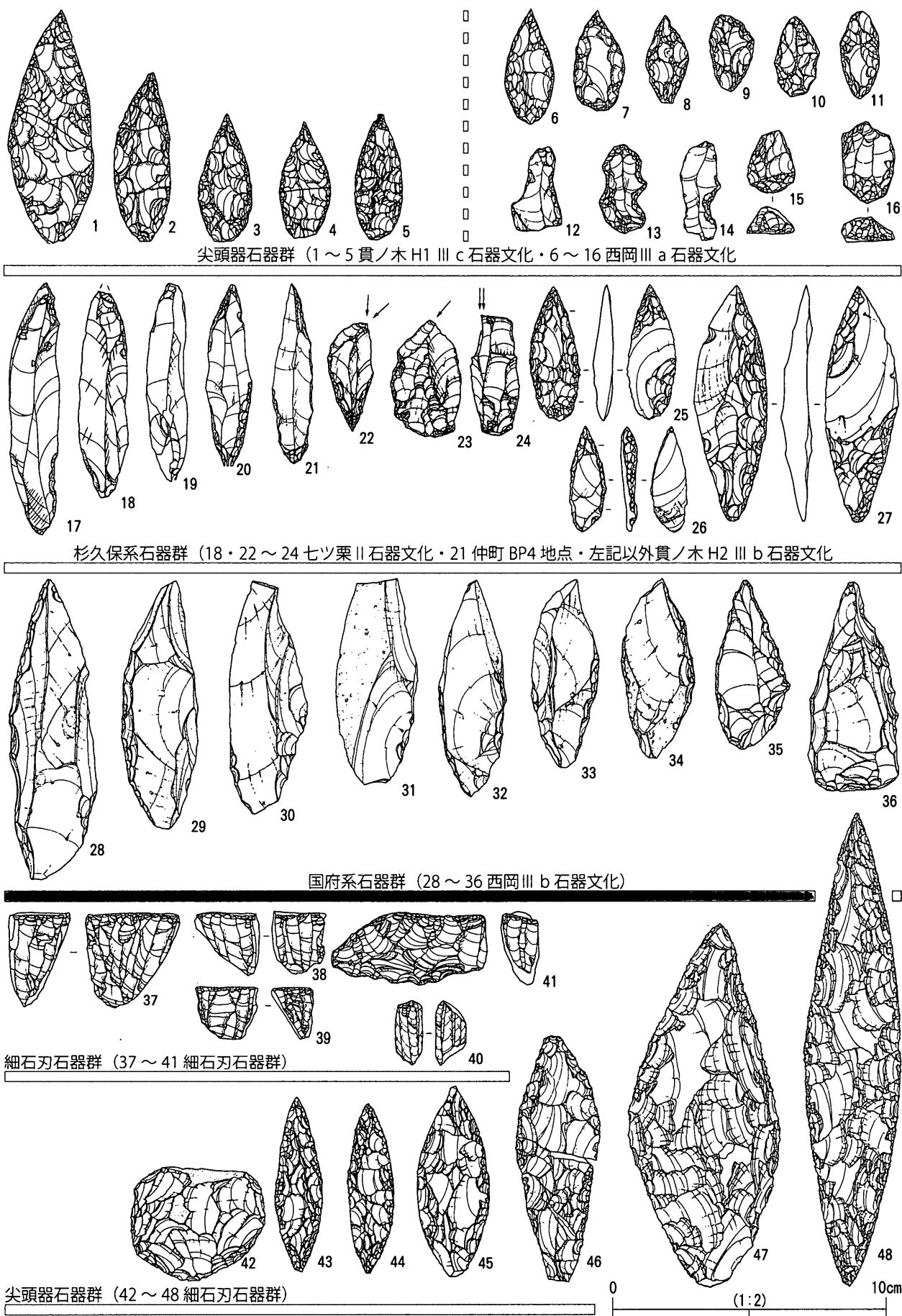


図7 野尻湖第Ⅳ・Ⅴ期の石器群 (1～36第Ⅳ期・37～48期第Ⅴ期)

ない。

長野県埋蔵文化財センターの発掘調査では、この時期の花粉分析のデータは得られなかった。最終氷期が終わろうとする時期であり、寒冷から温暖な気候に変わりゆく、気候変動が激しい時期であったと考えられる。

(2) 尖頭器石器群 (図7・42～48)

野尻湖第Ⅳ期に引き続き、槍先形尖頭器を主体とする石器群を尖頭器石器群とする。上ノ原Ⅱ石器文化、西岡Ⅲc石器文化が該当する。かつて上ノ原Ⅱ石器文化を野尻湖第Ⅳ期として位置づけたことがある⁽¹⁹⁾。野尻湖第Ⅴ期の尖頭器石器群として、大型の槍先形尖頭器と石斧を特徴とする神子柴系石器群を想定していた。そのため、石刃を持たない等の性格が異なる石器群については、前の時期として位置づけた。しかし、槍先形尖頭器の大型化と、神子柴系石器群の登場に関連があるとの考えから、これらを野尻湖第Ⅴ期と位置づけなおすこととする。

槍先形尖頭器は、一〇センチを越す大型が目立ち、両面に加工が施される。平面形は柳葉形や木葉形を呈し、滑らかな縁辺形状を持つ。断面形は凸レンズ形を呈し、側面からみる稜線は整った直線となる。槍先形尖頭器以外には、搔器や削器等が組成する。遺跡内での槍先形尖頭器生産はほとんど見られないことから、遺跡外で製作されたものが持ち込まれていると考えられる。

石材は無斑晶質安山岩や珪質頁岩等、黒曜石以外が多く用いられる。

(3) 細石刃石器群 (図7・37～41)

細石刃や細石刃核を組成する石器群を細石刃石器群とする。長野県埋蔵文化財センターの発掘調査では、断片的な細石刃、細石刃核の出土があるものの、石器文化・石器群と位置づけられるようなまとまった資料はない。上ノ原遺跡北部高校地点でまとまった資料が検出されているが、評価については本報告を待ってからとする。

細石刃核の形状としては、船底形と稜柱形の二つがみられるが、稜柱形の中には、船底形の細石刃核の剥離が進んだものが含まれていると思われる。

石材は黒曜石や珪質頁岩が多用されている。

四 野尻湖編年と南関東編年

日本列島の中で層位的事例に基づく編年研究が最も進んでいるのが、相模野台地と武蔵野台地である。多くの研究者に引用される諏訪間編年による相模野台地の編年⁽²⁰⁾と、武蔵野台地で検出される石器群の層位との比較検討をおこなう。野尻湖編年による主要石器の変遷および、他地域との時期対比を図8に示した。

南関東の斧形石器、台形石器、環状ブロック群は武蔵野台地Ⅹ層からⅨ層段階の石器群に限定的にみられる。そのため、野尻湖第Ⅰ期は武蔵野台地Ⅹ・Ⅹ層段階に並行すると位置づけられる。諏訪間編年では段階Ⅰ～段階Ⅱとなる。諏訪間編年の段階Ⅰと段階Ⅱは明確な石刃・縦長剥片剥離技術の成立を持って画されている。野尻湖編年では石刃・縦長剥片を持たない日向林Ⅰ石器文化と、石刃が主体となる大久保南Ⅰ石器文化や、石刃を含む貫ノ木H3Ⅰ石器文化についてはそれぞれが、次の野尻湖第Ⅱ期へのつながりが認められ、時間的並行を考慮せざるえない状況がある。そのため、野尻湖遺跡群での明確な石刃・縦長剥片剥離技術の有無を時間差として画することはできない。

野尻湖第Ⅱ期は武蔵野台地Ⅶ～Ⅵ層段階、諏訪間段階Ⅲ～Ⅳに対比される。石刃剥離技術が発達し、仲町B P2地点や、照月台Ⅰ石器文化にみられる中～大型の基部加工や二側縁加工のナイフ形石器の特徴は武蔵野台地Ⅶ層段階と諏訪間段階Ⅲのナイフ形石器と共通する特徴を有する。いっぽう、裏ノ山Ⅱ石器文化にみられる大型～小型の二側縁加工のナイフ形石器は武蔵野台地Ⅵ層段階、諏訪間段階Ⅳに対比できよう。問題となるのは、武蔵野台地Ⅶ層段階に対比される石器群と、Ⅵ層段階に対比される石器群を単純に時間差として区分できない点にある。

照月台Ⅰ石器文化は、遺構の埋土中にA Tが多く含まれることから、A T降灰直後の時間を与えることができる。そのため、石器群の内容はⅦ層段階だが、層位的には武蔵野台地Ⅵ層に並行することとなる。また、裏ノ山Ⅱ・東裏H2Ⅱ石器文化と仲町B P2地点では堆積が薄く細かい層位的区分が不可能である。さらに、Ⅶ層段階、Ⅵ層段階に対比できる石器群それぞれに斧形石器が共伴する。南関東

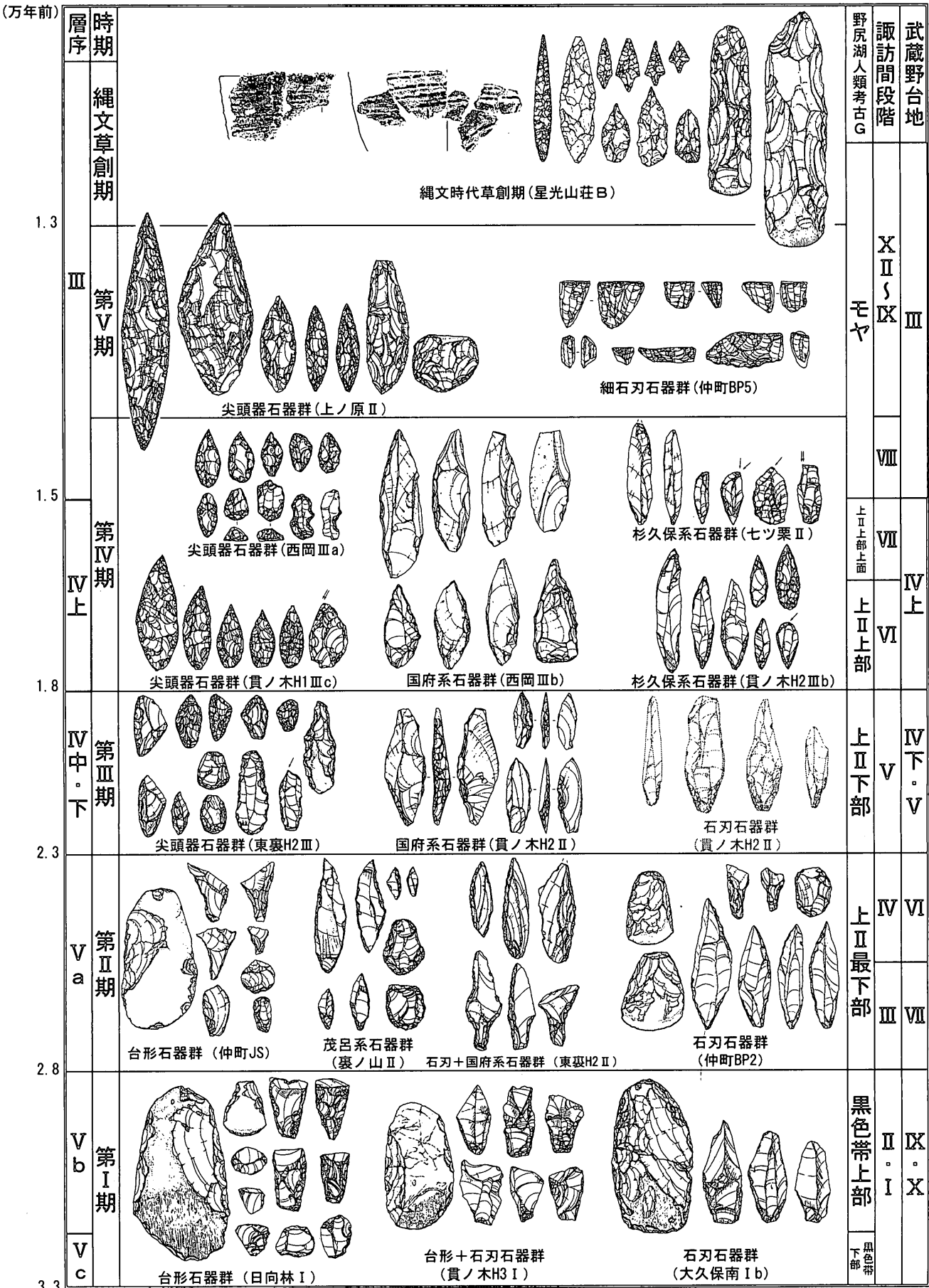


図8 野尻湖編年
(注) 石器のスケールは1:4・年代は文献11から13による。

での斧形石器の出土事例は、XⅠ層に限定されている。野尻湖遺跡群ではその後の時期となる野尻湖第Ⅱ期の多くの石器群に斧形石器が共伴している。野尻湖第Ⅰ期に斧形石器が多いことから、それらが混入しているとの指摘もある。³⁸⁾

しかし、もともと数が多いといっても、野尻湖遺跡群での総点数が二〇〇点あまりしかない斧形石器が、照月台Ⅰ石器文化、貫ノ木HⅤⅡ石器文化、吹野原Ⅰ石器文化、仲町J地点、仲町BP2地点で複数点の共伴がある上に、裏ノ山Ⅱ石器文化、東裏H2Ⅱ石器文化でも、斧形石器が共伴する可能性が高い。そうすると、斧形石器が共伴する石器群よりも斧形石器が共伴しない石器群の方が少ないことになる。これらの石器群のブロックの平面、垂直分布の状況は、共伴すると判断すべき分布を示すものが大半であり、もはや偶然の混じりこみとして説明できる数量をはるかに越えている。もともと斧形石器が多く利用される野尻湖遺跡群に、武蔵野台地より後の時期まで斧形石器が組成していても不思議はないと考える。

野尻湖第Ⅲ期は武蔵野台地V層・IV層下部段階、諏訪間段階Vに対比される。南関東におけるこの時期は、切出形ナイフ形石器、角錐状石器に国府系ナイフ形石器に象徴される。野尻湖遺跡群の国府系石器群は、第Ⅱ期に出現する。第Ⅱ期はAT降灰直後まで含まれている。九州島ではAT層直上で国府系石器群が検出されることが、野尻湖でも第Ⅱ期の終盤に、国府系石器群が出現するとの理解が可能であろう。また、国府系石器群は層位的出土事例から、次の野尻湖第Ⅳ期まで継続することが確実視される。斧形石器の組成については、今のところ明確な石器群はない。しかし、第Ⅱ期と評価した仲町BP2地点は、層位的に第Ⅲ期に属す可能性も考えられる。仲町BP2地点が第Ⅲ期となると、斧形石器はさらに後まで継続して組成することになる。また、第Ⅳ期の杉久保系石器群にも斧形石器の複数の共伴例がある。³⁹⁾

野尻湖第Ⅲ期から出現する槍先形尖頭器には「東内野型有樋尖頭器」(図6・1 7・24・36・37)と、「男女倉型有樋尖頭器」(図6・29・32)がある。^{39) 40)}「東内野型有樋尖頭器」は東裏H2Ⅲ石器文化にまとまった事例があるが、残念ながら時期

を確定できる層序がない。明確な出土層位を持つ石器群としては、七ツ栗Ⅰ石器文化に「東内野型有樋尖頭器」に類する槍先形尖頭器が一点だけ存在する(24)。こちらについては、隣接する野尻湖第Ⅳ期の杉久保系石器群(七ツ栗Ⅱ石器文化)より、明らかに層位的に下位に位置する。この槍先形尖頭器は、小型のチャート製で、樋状剥離は施されていないが、片側側縁の肩が張り左右非対称形を呈している。他に小型の二側縁加工のナイフ形石器(22・23)に、無斑晶質安山岩を石材とする、円形・拇指状搔器が伴っている。この七ツ栗Ⅰ石器文化の層位事例を根拠として、東裏H2Ⅲ石器文化の位置づけをおこなった。

いまのところ明確に野尻湖第Ⅲ期に位置づけられる石刃石器群はない。候補としては、貫ノ木H2Ⅱ石器文化の石刃石器群があげられているが、⁴¹⁾これらは層位的にはIV層上部に位置し、隣接する野尻湖第Ⅳ期の杉久保系石器群である貫ノ木H1Ⅲb石器文化に伴う可能性も考えられる。また、仲町BP2地点の石器群については、層位的に野尻湖第Ⅲ期に位置づけられてもよいブロックも複数存在した。石器型式的にも第Ⅲ期にこの手の石刃石器群が存在してもよいと考えるが、複数の斧形石器の組成と、堆積が厚いブロックでは、Va層主体の分布が見られたため、いまのところ、野尻湖第Ⅱ期と判断している。

野尻湖第Ⅳ期は武蔵野台地IV層上部からⅢ層下部、諏訪間段階VIⅦに対比される。南関東では、二側縁加工のナイフ形石器が発達する時期からが相当するが、野尻湖周辺では槍先形尖頭器が発達している。また、尖頭器石器群とは別に、発達した石刃石器群と位置づけられる杉久保系石器群が存在する。杉久保系石器群は南関東にはない石器群であり、野尻湖遺跡群では尖頭器石器群と同一層準から検出される。薄い石刃を素材として、鋭い尖端と尖った基部を持つ柳葉形の形態は、槍先形尖頭器と同一機能を有するナイフ形石器として評価できよう。また、第Ⅲ期から継続する国府系石器群もこの時期まで継続している。左右対称の平面形と、相対する側縁の加工面に入れ替わりによる表裏対称の横断面形は、槍先形尖頭器の形態を意識したものであろうか。

野尻湖第Ⅴ期は武蔵野台地Ⅲ層、諏訪間段階IXⅠに対比される。諏訪間段階

IXとXは細石刃石器群である。この時期の相模野台地は尖頭器石器群が姿を消し、細石刃石器群に変わってしまうとされている。野尻湖遺跡群での細石刃石器群は規模が小さく量も少ない。そのため、段階IX・Xにみられる細石刃核の型式変化を確認するだけの資料数がない。しかし、細石刃石器群の遺跡数の少なさと、遺跡規模の小ささは、他の時期の野尻湖遺跡群との比較であり、遺跡群の面積の狭さを考慮すると、一般的な遺跡密度と評価できよう。一方、諏訪間段階IX・Xで姿を消す尖頭器石器群は野尻湖遺跡群では継続している。第V期の尖頭器石器群は「神子柴系文化」と位置づけられた神子柴系石器群につながる。神子柴系石器群はその変遷過程の後半期には土器が共存するようになり縄文時代へと移り変わっていく。

五 先土器時代社会と野尻湖編年

1 野尻湖第Ⅰ期とそれ以前の日本列島

野尻湖第Ⅰ期に並行する本州、四国、九州には斧形石器やナイフ形石器など日本列島固有の石器が分布することから、大陸とは異なる独自の文化を形成していたと評価できる。この時期の野尻湖遺跡群を他地域の遺跡群と比較すると圧倒的に遺跡数が多く、遺跡規模が大きい。いまのところ、野尻湖遺跡群に匹敵する規模の遺跡群は発見されていない。日本列島で野尻湖第Ⅰ期より確実に古いと位置づけられる明確な石器群は未確認である。

野尻湖第Ⅰ期の斧形石器、ナイフ形石器、台形石器は形態的に整っており、発達した石器製作技術の存在を指摘できる。さらに、黒曜石、珪質頁岩、無斑晶質安山岩等の遠隔地の石材が、多方面から大量に持ち込まれている事実から人びとがどこに行けばどんな石材を得ることができるのかという情報を持っていたことになる。また、石材の地理的情報を把握していたとすれば、同一空間内の植生、動物相等の情報も把握していた可能性が高い。大陸から日本列島にやって来た最初の人びとの様子は解明されていないが、来て間もない人びとが、このような生

活に必要な詳細な地理的情報を持っていたとは考えられないため、野尻湖第Ⅰ期の人びとは、最初の人びとが来てから一定期間を経た人びとと評価できる。

日本列島にやって来た人びとは黒曜石、珪質頁岩、無斑晶質安山岩などの石材の産地と、野尻湖周辺などの食料資源の豊かな地域を発見した。これらの発見により安定した石器生産、食料生産を手に入れ、人口が増えたのであろう。このような地理情報の入手により日本列島の環境に適応した人びとは、日本列島の全域に遺跡を残したと考えられる。剥片石器に有効な石器石材産地がない野尻湖遺跡群は、食料獲得活動の中心的な場、すなわち、周期的な移動生活の中で必ず立ち寄る場所であったと考えられる。

2 野尻湖第Ⅱ期の日本列島

人びとが日本列島に定着してから時間を経過するにつれ、さらなる石器生産、食糧生産の発展があったと考えられる。それが、よりよい石器石材の活用、石材の特性を生かした石器の製作と考えられる。野尻湖第Ⅰ期の剥片石器には、ほとんど石材による差は認められなかった。それが第Ⅱ期になると、黒曜石、珪質頁岩、無斑晶質安山岩などでそれぞれ異なる石器製作がおこなわれるようになる。黒曜石、珪質頁岩では石刃製作技術が発達し、完成されたナイフ形石器が作られるようになる。無斑晶質安山岩産地では連続した横長剥片生産技術が生み出されつつあった。このような石材適応が、それぞれの石材産地を中心とする地域性を生むこととなった。野尻湖は多くの人びとの活動領域に組み込まれていたため、広域の異なる地域性を持つ石器群が共存することになったのであろう。

3 野尻湖第Ⅲ期の日本列島

野尻湖第Ⅲ期には最終氷期最寒冷期を迎える。依然として広域の人びとの活動領域に組み込まれていた野尻湖ではあるが、遺跡数の減少から訪れる人びとの減少が読み取れる。これが、日本列島全体の減少であるのか、標高の高い地域の特性であるかはわからないが、石器製作技術は進歩を続け槍先形尖頭器製作技術の

登場など、次の時期への新たな進展の土台が築かれたと考える。

4 野尻湖第Ⅳ期の日本列島

最寒冷期を越えた頃、寒冷化に適応し新たな石器製作技術を手に入れた人びとが再び活動を増すことになった。第Ⅱ期で生まれた地域性はさらに個性を強める。石刃石器群の杉久保系石器群では、極めて斉一性の高いナイフ形石器と彫器が製作された。尖頭器石器群は面的調整の発達により、斉一性を高めた槍先形尖頭器が発達する。また、無斑晶質安山岩による国府系石器群も継続していた。

5 野尻湖第Ⅴ期の日本列島

大陸から北海道と九州に伝わった細石刃により、日本列島の多くの地域で、ナイフ形石器が消滅し、細石刃石器群が広まる。野尻湖遺跡群にも細石刃石器群が伝播してきた。しかし、これまでの石器群と比べると規模が小さく、密度が低い。

いっぽう、前時期まで中部高地黒曜石原産地周辺で発達した尖頭器石器群は、石器の大型化を迫られることとなる。その要因が列島内外のどちらにあるかは定かではないが、尖頭器石器群が主体となっていた中部高地地域では、大型の槍先形尖頭器を製作する文化が受容されたと考えられる。大きな石材の入手が困難な黒曜石では、槍先形尖頭器の大型化の要求にこたえられなかったことから、槍先形尖頭器の製作遺跡は黒曜石原産地周辺から、無斑晶質安山岩などの大型石材の入手が可能な地域へと移り変わった。野尻湖遺跡群でも第Ⅳ期的な様相を持ちながらも、大型槍先形尖頭器を組成する尖頭器石器群が存在する他、石器製作を伴わない「神子柴型石斧」や「神子柴型尖頭器」の出土例が多数確認されている。出現期の神子柴系石器群は土器を組成しない野尻湖第Ⅴ期に属す尖頭器石器群として理解される。神子柴系石器群は途中段階で土器を組成するようになる。野尻湖遺跡群では、複数の神子柴系石器群に土器が共伴しており、石器土器型式の違いや放射性年代測定値の差が確認されている。先土器時代全般にわたり利用されてきた野尻湖遺跡群は縄文時代草創期に至るまで継続している。

おわりに

野尻湖遺跡群の先土器時代石器群の変遷について述べてきた。編年の組み立てにあたっては、当然のことながら南関東の編年を常に意識していた。野尻湖遺跡群の南関東的な石器群については、南関東に対比できる編年を組むことができた。しかし、本稿でみたように野尻湖遺跡群には南関東にはない東北・北陸地方の石刃石器群や、国府系石器群などがあつた。そして、これら南関東にはない石器群と南関東的な石器群との層位対比、石器型式対比が直接できる数少ないフィードであることが確認できた。層位的な見地で南関東と比較すると、あいまいな点や不確定要素が多いが、逆に層位のみに縛られることなく、石器の型式変遷の説明と、周辺地域の事例を考慮して組み立てることができたように思える。層位が薄いため今後訂正すべき部分も出てくると思われる。諸方の批正を待ちたい。

注

- 1 杉原莊介「群馬県岩宿発見の石器文化」(『明治大学文学部研究報告』第一冊、一九五六年)。
- 2 安藤政雄「一 先土器時代の研究」(『日本考古学を学ぶ』(一)、有斐閣選書、六四一七八頁、一九七八年)。
- 3 矢島國雄・鈴木次郎「相模野台地における先土器時代研究の現状」(『神奈川考古』第1号、一一三〇頁、一九七六年)。
- 4 小田静夫「武蔵野台地に於ける先土器文化」(『神奈川考古』第八号、一一三〇頁、一九八〇年)。
- 5 芹沢長介・麻生優「北信・野尻湖底発見の無土器文化(予報)」(『考古学雑誌』三九二、二六—三三頁、一九五三年)。
- 6 野尻湖発掘調査団「野尻湖の発掘 一九六二—一九七三」(共立出版、一九七五年)。
- 7 林茂樹・樋口昇一・森嶋稔・笹沢浩・小林孚・畑田充・北村直次「杉久保A遺跡緊急発掘調査報告—長野県上水内郡信濃町野尻湖底」(『長野県考古学会誌』八、一一—八、一九七〇年)。

- 8 小林達雄「伊勢見山遺跡」(『長野県史』考古資料編全一巻(二)主要遺跡北東信、五七—六二頁、一九八二年)。
- 9 野尻湖人類考古グループ「野尻湖周辺の人類遺跡」(『地質学論集』一九、二二—二四九頁、一九八〇)の他、『地団研専報』二七、『地団研専報』三三、『地団研専報』三七、『野尻湖博物館研究報告』一、『野尻湖博物館研究報告』四、『野尻湖ナウマンゾウ博物館研究報告』八で報告されている。
- 10 織笠昭・野尻湖発掘調査団「野尻湖遺跡群の編年と地域の様相」(『日本考古学協会第五二回総会研究発表要旨』、八一九、一九八六年)。
- 11 長野県埋蔵文化財センター『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書一五 信濃町内その一 日向林B遺跡・日向林A遺跡・七ツ栗遺跡・大平B遺跡』(二〇〇〇年)。
- 12 長野県埋蔵文化財センター『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書一五 信濃町内その一 裏ノ山遺跡・東裏遺跡・大久保南遺跡・上ノ原遺跡』(二〇〇〇年)。
- 13 長野県埋蔵文化財センター『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書一五 信濃町内その一 貫ノ木遺跡・西岡A遺跡』(二〇〇〇年)。
- 14 長野県埋蔵文化財センター『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書一六 信濃町内その二 縄文時代〜近世編』(二〇〇〇年)。
- 15 長野県埋蔵文化財センター『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書一六 信濃町内その二 信濃町データ編』(二〇〇〇年)。
- 16 長野県埋蔵文化財センター『一般国道一八号(野尻バイパス)埋蔵文化財発掘調査報告書二 信濃町内その二 貫ノ木遺跡・照月台遺跡』(二〇〇四年)。
- 17 長野県埋蔵文化財センター『一般国道一八号(野尻バイパス)埋蔵文化財発掘調査報告書三 信濃町内その三 仲町遺跡』(二〇〇四年)。
- 18 谷和隆・大竹憲昭「野尻湖遺跡群における石器文化の変遷」(『第15回長野県旧石器文化研究交流会発表資料—シンポジウム「野尻湖遺跡群の旧石器時代編年」』、長野県旧石器文化研究交流会、二二—五七、二〇〇三年)。
- 19 菱田量「日向林B遺跡および貫ノ木遺跡におけるローム層の鉱物分析」(『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書一五 信濃町内その一 日向林B遺跡・日向林A遺跡・七ツ栗遺跡・大平B遺跡 旧石器時代本文編』、長野県埋蔵文化財センター、一七—一八六頁、二〇〇〇年)。
- 20 菱田量「貫ノ木遺跡のテフラ分析」(『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書一五 信濃町内その一 貫ノ木遺跡・西岡A遺跡 旧石器時代本文編』、長野県埋蔵文化財センター、二四九—二五三頁、二〇〇〇年)。
- 21 吉川昌伸「針ノ木遺跡の花粉化石群」(『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書一五 信濃町内その一 日向林B遺跡・日向林A遺跡・七ツ栗遺跡・大平B遺跡 旧石器時代本文編』、長野県埋蔵文化財センター、一九八—二〇七、二〇〇〇年)。
- 22 鈴木茂「第三節 貫ノ木遺跡のプラントオパール分析」(『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書一五 信濃町内その一 貫ノ木遺跡・西岡A遺跡 旧石器時代本文編』、長野県埋蔵文化財センター、二五四—二五六頁、二〇〇〇年)。
- 23 白石浩之「西南日本におけるナイフ形石器終末期の予察」(『神奈川考古』第三号、一—三〇頁、一九七八年)。
- 24 麻柄一志「いわゆる立野ヶ原型ナイフ形石器の基礎的整理」(『旧石器考古学』三三、四九—五八頁、一九八六年)。
- 25 佐藤宏之「台形様石器研究序論」(『考古学雑誌』七三—三、一—三七頁、一九八八年)。
- 26 谷和隆「第二節 日向林I石器文化の剥片石器」(『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書一五 信濃町内その一 日向林B遺跡・日向林A遺跡・七ツ栗遺跡・大平B遺跡』、二二—二六頁、二〇〇〇年)。
- 27 須藤隆司「群馬県戴塚遺跡の石器文化—ナイフ形石器の型式学的研究—」(『明治大学考古学博物館報』二、二七—五〇頁、一九八六年)。
- 28 本来であれば、茂呂系石器群に対して、「東山系石器群」のような、「標識遺跡名」+「系石器群」として呼称したいところであるが、筆者の中で「東山型ナイフ形石器」の定義づけができないこともあり、便宜的に石刃石器群といった呼称を用いることとする。
- 29 報告書で「裏ノ山I石器文化」として報告した石器群について、現在は「裏ノ山II石器文化」に含まれると考えている。
- 30 大竹憲昭「第五章成果と課題」(『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書一五 信濃町内その一 貫ノ木遺跡・西岡A遺跡』、長野県埋蔵文化財センター、二九—三三頁、二〇〇〇年)。
- 31 渡辺哲也「信濃町東裏遺跡の調査」(『第18回長野県旧石器文化研究交流会発表資料』、長野県旧石器文化研究交流会、一三—一七頁、一九九四年)。

- 32 中村由克「信濃町上ノ原遺跡（県道地点）の調査」、『第八回長野県旧石器文化研究交流会発表資料』、長野県旧石器文化研究交流会、三五―四一頁、一九九六年。
- 33 中村由克「信濃町上ノ原遺跡（県道地点）の調査―その二―」、『第九回長野県旧石器文化研究交流会発表資料』、長野県旧石器文化研究交流会、三二―四〇頁、一九九七年。
- 34 中村由克・中村敦子「信濃町上ノ原遺跡の第二次調査」、『第六回長野県旧石器文化研究交流会発表資料』、長野県旧石器文化研究交流会、二六―三三頁、一九九四年。
- 35 中村由克「〈速報〉長野県上ノ原遺跡の細石器文化の遺構（Ⅰ）」、『考古学ジャーナル』三四二、ニューサイエンス社、四二―四四頁、一九九二年。
- 36 中村由克「〈速報〉長野県上ノ原遺跡の細石器文化の遺構（Ⅱ）」、『考古学ジャーナル』三四四、ニューサイエンス社、三三―三六頁、一九九二年。
- 37 諏訪間順「相模野台地における先土器時代石器群について」、『神奈川考古』二四、一―三〇頁、一九八八年。
- 38 須藤隆司「中部地方の地域編年」、『旧石器時代の地域編年の研究』、安斎正人・佐藤宏之編、同成社、一〇三―一四〇頁、二〇〇六年。
- 39 堤隆「槌状剥離を有する石器の再認識（上）」、『信濃』第四〇巻第四号、二四―四五頁、一九八八年。
- 40 堤隆「槌状剥離を有する石器の再認識（下）」、『信濃』第四一巻第五号、三八―六四頁、一九八九年。
- 41 森嶋稔「長野県長野市信田町上和沢出土の尖頭器」、『信濃』第一九巻第四号、三三―三五頁、一九六七年。
- 42 森嶋稔「神子柴型石斧をめぐっての試論」、『信濃』第二〇巻第四号、一一―二二頁、一九七〇年。
- 43 谷和隆「第五章 成果と課題」、『一般国道一八号（野尻バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書―信濃町内その二 貫ノ木遺跡・照月台遺跡』、長野県埋蔵文化財センター、二五六―二八一頁、二〇〇四年。